

立命館大学アート・リサーチセンター
 文部科学省 共同利用・共同研究拠点「日本文化資源デジタル・アーカイブ研究拠点」
 2018 年度 共同研究成果報告書〔研究設備・資源活用型〕

2019 年 4 月 30 日 提出

1. 研究課題名	
「市民が作った雑誌『京都 TOMORROW』のデジタル・アーカイブ化」 (英文標記: _____)	
2. 研究代表者	
氏名(ふりがな)	所属機関・職名
小黒 純 (おぐろ じゅん)	同志社大学社会学部メディア学科
3. 研究分担者 (合計: _____ 名)	
氏名(ふりがな)	所属機関・職名
折田 泰宏(おりた・やすひろ)	けやき法律事務所、弁護士
大井 美夏子(おおい・みかこ)	社会福祉士
樋口 摩彌(ひぐち・まや)	立命館大学衣笠総合研究機構(日本学術振興会特別研究員 PD)

4. 研究課題の概要(300 字程度)
<p>本研究は 1988 年から 2003 年にかけて、京都に拠点を置く学者、弁護士、科学者、市民運動家らが、社会の諸問題を、市民の視線で捉え直し、議論を深め、発信し続けた、手作りの雑誌『京都 TOMORROW』約 50 号を対象にする。「京都の市民による、市民のための雑誌」として、特定のイデオロギーに偏らず、高齢者ら社会的弱者を包摂するベクトルで編集された。この編集方針に共鳴した、著名な文化人が数多く寄稿した。「多事争論」を信条とした、先駆的な雑誌だったと言える。</p> <p>紙媒体の雑誌として現在すでに稀少性があり、著名な文化人の言説を記録した、貴重な日本・京都の文化資源として、デジタルアーカイブ化が急がれる。内容を調査し、データベース化すれば、社会運動研究やジャーナリズム研究だけでなく、社会学、政治学、行政学、社会福祉学、メディア研究論といった、学際的なアプローチが可能となる。</p>
5. 研究成果の概要
<p>ARC 施設内で研究設備を利用し、スタッフの助言をいただきながら、対象としていた、保存されていた「京都 TOMORROW」全冊をデジタル・アーカイブ化することができた。</p> <p>各号の特集で取り上げられているテーマについて分析した。その結果、1988 年から 1992 年にかけての Vol.1 シリーズでは、「建築・景観」「環境」に関するテーマが多く、京都の文化財や環境、町並みの進みゆく変化について、編集委員らの危機感が反映した形になっていることが明らかになった。</p> <p>次に、1993 年から 1996 年にかけての Vol.2 シリーズでは、「文化」「生活」のテーマが目立った。女性編集員が増え、女性読者を意識した身近なテーマを掘り下げていることが分かった。さらに、1997 年から 2003 年の Vol.3 シリーズでは、「政治」「金融」へとテーマが移っていた。</p> <p>また、京都の著名な文化人やスポーツ選手だけでなく、市井の人々、たとえば、タクシー運転手ら、幅広くインタビューし、大きく取り扱っていることも、編集方針が如実に反映した結果と言えることが裏付けられた。</p>

